

## 寄贈図書リスト

- ① 宇宙流体力学の基礎 [改訂版], 福江純 和田桂  
一 梅村雅之, A5判, 416ページ, 3,600円+税,  
日本評論社

## 月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日締切、翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。校正をお願いしておりますので、締切日よりなるべく早めにお申込みください。

e-mailで [toukou@geppou.asj.or.jp](mailto:toukou@geppou.asj.or.jp)宛にお送りください。折り返し、受領の連絡をいたします。

## 人事公募

### 東京大学大学院理学系研究科 附属天文学教育研究センター 教員

1. 募集人員：助教1名
2. (1) 所属：大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター  
(2) 勤務地：長野県木曾郡木曾町三岳10762-30  
東京大学大学院理学系研究科附属  
天文学教育研究センター  
木曾観測所
3. 専門分野：観測天文学
4. 職務内容：  
当センターは銀河天文学、電波天文学、恒星物理学、時間軸天文学の4部門および木曾観測所・アタカマ観測所で構成され、長野県の木曾シュミット望遠鏡、南米チリ・アタカマでTAO等を展開しています。これらの研究部門・プロジェクトと連携をとりつつ、木曾シュミット望遠鏡およびその観測装置トモエゴゼンカメラの運用と科学的成果の創出に貢献し、観測天文学を進められる方を求めます。木曾観測所の運用の諸業務も分担して行っていただきます。特に地方施設の諸事情を理解し、所員と協調して積極的に観測所の運営・運用に携わる人を求めます。また天文学専攻の専任教員として大学院および学部教育も担当していただきます。
5. (1) 着任時期：2023年2月1日以降のなるべく早い時期  
(2) 任期：なし（定年 65歳）
6. 応募資格：大学院博士課程修了、またはそれと同

等以上の方

7. 提出書類：
  - (1) 略歴書（写真貼付）
  - (2) 研究歴（これまでの研究内容の概要）
  - (3) 研究論文リスト
  - (4) 主要論文別刷（3編以内）
  - (5) 着任後の研究計画と抱負
  - (6) 本人について意見を述べられる方3名の氏名と連絡先（e-mailアドレス）
8. 応募締切：2022年12月8日（木）必着
9. 提出先・問合わせ先：
  - (1) 応募書類を1つのPDFにまとめたうえで、以下のメールアドレスに送付のこと。メールの件名は「木曾観測所助教応募」とすること。メール送付後、3日以内に受信確認のメールが届かない場合は下記問い合わせ先まで電話すること。  
メール送付先：[Application2022@ioa.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:Application2022@ioa.s.u-tokyo.ac.jp)
  - (2) 宛先 東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター 土居 守
  - (3) 問合わせ先 東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター  
木曾観測所長 小林 尚人  
Tel: 0422-34-5021 E-mail: [naoto@ioa.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:naoto@ioa.s.u-tokyo.ac.jp)
10. 応募上の注意  
本研究科では、男女共同参画を積極的に推進しています。詳しくは下記URLの理学系研究科男女共同参画基本計画をご覧ください。  
<https://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/overview/gender/>

## 研究会・集案案内

## 公開講演会のご案内

日本学士院では、家正則会員を講師に、天文をテーマとする中学生・高校生向けの公開講演会を下記のように開催いたします。

家会員は、すばる望遠鏡建設計画に貢献し、130億光年かなたの初期宇宙を観測して、宇宙が再電離した「宇宙の夜明け」の時期を特定しました。また、すばる望遠鏡の視力を10倍にする補償光学装置を開発し、近くの恒星を巡る惑星の観測に道を拓きました。詳細は日本学士院ウェブサイトをご覧ください。

<https://www.japan-acad.go.jp/>

日 時：令和4年12月10日（土）14:30～15:30

講 師：家正則（日本学士院会員，自然科学研究機構国立天文台名誉教授，総合研究大学院大学名誉教授）

講演題目：「宇宙史・生命史を学び，文明社会の将来を考えよう」

対 象：中学生・高校生（一般の方も聴講可能）

開催方法：オンライン及び会場（日本学士院：台東区上野公園7-32）のハイブリッド開催

※新型コロナウイルス感染症の状況により，開催方法の変更，中止となる場合がございます。

お申し込み方法：

1. オンライン参加（定員500名・先着順）

下記よりお申し込みください。

[https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN\\_haf1bBo5S2Su7VzCg1vckQ](https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_haf1bBo5S2Su7VzCg1vckQ)

2. 会場（定員75名・抽選制）

11月21日（月）までに，下記よりお申し込みください。

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2022/102701.html>

主 催：日本学士院

後 援：台東区，台東区教育委員会

協 力：上野の山文化ゾーン連絡協議会

## 会務案内

## 会長候補者選挙結果

日本天文学会定款第17条および会長・副会長・理事・監事選考細則（以下，細則）に基づき行いました会長候補者の選挙について，結果を次のように報告します（細則第9条）。

推薦された候補者は井田茂氏1名だったため，細則第6条により投票は行わず，井田茂氏を会長候補者としました。

なお，この結果は，細則第9条に基づき理事会および代議員に報告いたしました。

（選挙管理委員会委員長 本間希樹）

## 日本天文学会 2022年秋季年会報告

2022年度秋季年会は，9月13日（火）から15日（木）の3日間，新潟大学（新潟市）にて開催された。新型コロナウイルスの影響が残る中，会場の人数制限や消毒等の感染予防対策などが必要となったが，開催地・大学の協力もあり3年ぶりとなる現地開催が実現した。同時に，現地に来られない方も議論に参加いただけるよう，現地参加とあわせて試験的にオンラインでの講演と聴講も可能とした（ハイブリッド開催）。さらに，今回から年会参加関連費が改訂され，感染症予防対策などの目的で事前支払制とし，QRコードチェックインを導入した。講演件数は口頭講演が547件，ポスター講演が144件で，合計691件の講演があった。年会参加登録人数は会員982名，非会員77名の計1,059名（うち現地参加者は507名）であった。3件の企画セッションと天文教育フォーラムも開催された。全国的な感染症の状況変化を受け，諸々の感染対策措置に加え，急遽，現地リモート双方向での講演・質疑応答を導入するなど手探りの開催となり，予期せぬ問題等で参加者にはご不便をおかけしたが，皆様のご理解とご協力により全体として有効な年会とすることができた。参加者・関係者の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

座長は次の60名の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し，感謝の意を表する。（敬称略）

	9月13日(火)		9月14日(水)		9月15日(木)	
	10:30-12:40	14:00-16:10	9:30-11:40	13:00-15:40	9:30-11:40	13:00-15:10
A	星間現象 佐野栄俊 (岐阜大学)	星間現象 霜田治朗 (名古屋大学)	星間現象 信川久実子 (近畿大学)	星間現象 田中孝明 (甲南大学)	原始惑星系円盤 田中佑希 (東北大学)	原始惑星系円盤 野村英子 (国立天文台)
B	銀河団 藤田裕 (東京都立大学)	観測機器 山岡和貴 (名古屋大学)	観測機器 小林翔悟 (東京理科大学)	観測機器 萩野浩一 (関東学院大学)	観測機器 深沢泰司 (広島大学)	観測機器 中澤知洋 (名古屋大学)
C	JASMINE 馬場淳一 (国立天文台)	JASMINE 河田大介 (UCL)	JASMINE 河原創 (JAXA)	銀河系中心 斉田浩見 (大同大学)	銀河系中心 野田博文 (大阪大学)	銀河系中心 西山正吾 (宮城教育大学)
D	活動銀河核 川勝望 (呉工業高等専門学校)	活動銀河核 和田桂一 (鹿児島大学)	活動銀河核 高橋真聡 (愛知教育大学)	恒星進化 佐藤寿紀 (立教大学)	恒星進化 本田敏志 (兵庫県立大学)	恒星進化 田中周太 (青山学院大学)
E	星形成 千秋元 (国立天文台)	星形成 徳田一起 (九州大学/国立天文台)	星形成 古屋玲 (徳島大学)	星形成 奥住聡 (東京工業大学)	銀河 小麦真也 (工学院大学)	銀河 江草芙実 (東京大学)
F	地下天文学 石徹白晃治 (東北大学)	地下天文学 鈴木英之 (東京理科大学)	観測機器 新沼浩太郎 (山口大学)	観測機器 今井裕 (鹿児島大学)	観測機器 中島拓 (名古屋大学)	観測機器 米倉寛則 (茨城大学)
G	惑星系 増田賢人 (大阪大学)	惑星系 小玉貴則 (東京大学)	惑星系 小久保英一郎 (国立天文台)	観測機器 上塚貴史 (東京大学)	観測機器 大澤亮 (国立天文台)	観測機器 小谷隆行 (アストロバイオロ ジーセンター)
H	銀河形成 播金優一 (東京大学)	銀河形成 矢島秀伸 (筑波大学)	銀河形成 中島王彦 (国立天文台)	銀河形成 梅畑豪紀 (名古屋大学)	銀河形成 鳥羽儀樹 (国立天文台)	銀河形成 岡本崇 (北海道大学)
I	太陽 一本潔 (京都大学)	太陽 庄田宗人 (東京大学)	太陽 成影典之 (国立天文台)	太陽 岩井一正 (名古屋大学)	宇宙論 西澤淳 (岐阜聖徳学園大学)	宇宙論 西道啓博 (京都大学)
J	教育・広報・他 富田晃彦 (和歌山大学)	コンパクト天体 北本俊二 (立教大学)	コンパクト天体 根来均 (日本大学)	コンパクト天体 志達めぐみ (愛媛大学)	コンパクト天体 鈴木昭宏 (東京大学)	コンパクト天体 河合誠之 (東京工業大学)

〈記者会見〉

日本天文学会2022年秋季年会記者会見は、年会前日の9月12日(月) 14:00からオンサイトとオンラインのハイブリッド形式で開催された。山本智会長による挨拶に始まり、日本天文学会の組織と活動の概要、今秋季年会の紹介を行った。続いて、年会開催地である新潟大学における天文学研究・教育の紹介を同大学の下西隆氏が行った。その後、年会研究講演から下記の1件についての詳しい学術発表を行った。当日は報道機関からオンサイトで2社、オンラインで5社の参加があった。メディアでの紹介は、10月6日現在で少

なくとも、NST新潟総合テレビ・フジテレビによる放映、新聞34紙、WEB10件、雑誌2件(予定を含む)を確認している。なお、記者会見の司会は太田耕司副会長がオンサイトで務めた。

学術発表

「木星で今世紀最大の『火球』を発見」  
有松亘(京都大学)、渡部潤一(国立天文台)  
(太田耕司、生田ちさと)

## 〈企画セッション〉

[地下からの天文・宇宙観測]

世話人：石徹白晃治，神田展行，久徳浩太郎，小汐由介，鈴木英之，横山順一

神岡地下では太陽ニュートリノの精密観測，超新星ニュートリノの観測やガンマ線バーストに付随する重力波探索など様々な天文・宇宙観測を進めてきた。今後，Super-Kamiokandeではガドリニウム導入による超新星背景ニュートリノの検出，KamLAND-Zenでのレプトジェネシス傍証へ向けた0vbb崩壊の検出が期待されている。Hyper-Kamiokandeの建設も順調に進んでいる。KAGRAはLIGO，Virgoとの第4期共同観測に合流すべく準備を進めている。そのような状況で，地下からのニュートリノや重力波を用いた天文・宇宙観測と電磁波を用いた天文観測との融合を狙い幅広い議論を行うために本企画セッションを開催した。

基調講演としては，午前にニュートリノや重力波を含むマルチメッセンジャー観測の重要性を東京大学の諏訪雄大氏に説明していただき，大阪公立大学の澤田崇広氏と東北大学の清水格氏にそれぞれ重力波観測とニュートリノ観測の現状を報告していただいた。その後，午前は重力波検出器の技術や解析手法，フォローアップ観測，連星ブラックホール系について幅広い話題の講演と議論があった。午後は太陽ニュートリノ実験や超新星ニュートリノ探索の講演だけでなく，惑星形成過程を考慮した太陽モデルが太陽ニュートリノに与える影響や鉱物結晶中の原子配列の乱れを利用した暗黒物質探索の講演があり多様な議論でセッションが盛り上がった。また，Hyper-Kamiokandeでの圧倒的な天体ニュートリノ観測能力に一同驚愕した。セッションへの参加者は午前で80名程度，午後で55名程度であった。分野的なことを考えると驚異的な参加者数といえる。このセッションをきっかけに物理学会での発表が多かった地下からの天文・宇宙観測が天文学会でも増えるきっかけになることを期待する。

[JASMINEが切り拓く近赤外時系列位置・測光天文学]

世話人：河田大介，馬場淳一，河原創，松永典之

Japan Astrometry Satellite Mission for Infrared Exploration (JASMINE) 計画は，JAXA 宇宙科学研究所の公募型小型科学衛星計画3号機に選定され，2028年打ち上げ目標に向けて準備を進めている。JASMINEは，我々の天の川銀河（銀河系）の形成史の探求と生命居住可能領域にある地球に似た系外惑星の探査の両方をターゲットにした意欲的なプロジェクトである。銀河系

に関しては，世界初の近赤外線位置天文衛星として，現在，多大な成果を挙げているESAの可視位置天文衛星Gaiaでも到達することのできない，銀河系中心の星の正確な距離と運動を測定し，銀河系中心核構造と形成史を明らかにすることが目標である。系外惑星に関しては，銀河系中心方向を観測できない季節に，M型矮星の時系列測光を行うことにより，生命居住可能領域にある地球に似た惑星を探査することを目指している。また，銀河系中心方向の観測では，高精度位置天文測定を達成するために，多数回撮像を行うため，時系列測光データも提供することができ，星振学，変光星，マイクロレンジング，ブラックホール探査などにも重要なデータを提供することができる。本企画セッションは，国内の幅広い分野にわたるサイエンスコミュニティーからの声を集め，JASMINEが提供する近赤外時系列位置・測光天文学という新しい軸の観測データを，より多くのサイエンスに有益なものにするための議論を行う目的で企画された。

まず，初日の午前中では，JASMINE計画PIの郷田直輝氏による基調講演をはじめ，JASMINEチームから，JASMINEミッションの概要とプロジェクトの進捗状況が報告された。午後には，主に銀河系サイエンスについての発表があり，西山正吾氏による銀河系中心核構造サイエンスと越本直季氏による銀河系中心領域の時系列測光観測による重力マイクロレンズ探査の展望に関する2件の基調講演と，さらに5件の一般講演が行われた。すばる望遠鏡，PRIME望遠鏡，NASAのRoman衛星計画，そして電波やX線観測との連携についての議論がなされた。2日目の午前は，小谷隆行氏による系外惑星探査の現状や将来計画についての基調講演があり，さらに10件の一般講演が行われ，JASMINEで発見される地球型惑星の物理的および化学的特性を調べるための，すばる望遠鏡やPRIME望遠鏡，そしてESAのAriel衛星計画との連携も議論された。

ハイブリッド開催の年会での本企画セッションは，学会および会場関係者の方々の努力のおかげで，非常にスムーズに進行でき，現地参加者約30人，リモート参加者約60人に参加いただいた。現地およびリモート参加者の両方からの発表や質問，議論も活発に行われ，非常に有意義なセッションとなった。特に現地会場では，セッション後も活発な議論が続き，ESAのGaiaやNASAのTESSといった最近公開されたデータを利用した研究をしている研究者から，どのようなデータ公開が最終的なミッションのインパクトを上げることにつながるかという率直な意見を聞くことができ，今後のJASMINEミッションの準備を進めるうえ

でも大変有意義な機会となった。

[銀河系中心研究の新展開]

世話人：本間希樹，秋山和徳，岡朋治，齊田浩見，西山正吾，野田博文

銀河系中心部は星やガスが密集し、複雑で多様な天体現象を含有する銀河系において特異な領域である。中心の巨大ブラックホールSgr A\*やそれを数100 pcに渡って取り巻くガスや星の複雑な三次元構造、星形成活動、中間質量ブラックホールの候補天体、Sgr A\*の過去の活動の痕跡など、多様な空間・時間スケールの天体現象を対象に電波からガンマ線に至るまでのすべての波長帯で観測的研究が行われてきた。今年春に報告されたEvent Horizon Telescope (EHT) によるSgr A\*の影の初撮影、ALMAによる中間質量ブラックホール候補天体の探査、SubaruによるSgr A\*を用いた重力理論の検証や中心核バルジ全体の研究、すぐく衛星で観測された鉄輝線によるエコーなどを通じたSgr A\*の過去の活動の痕跡の探査など、銀河系中心部の研究から近年創出された画期的な成果は枚挙にいとまが無い。一方で、対象天体やその空間・時間スケール、観測および理論的手法が多岐にわたるために、通常のアソシエーションでは複数の分科会に講演が分散し、全貌をつかむことが難しい。そこで本企画セッションでは銀河系中心領域の研究者を一堂に集め、銀河系中心領域の最新の研究成果を俯瞰し、今後の展望を議論することを目指した。

本企画セッションは9月14日の午後および翌15日の午前・午後の計6時間の3つのセッションを通して、多様な銀河系中心研究を網羅する密度の濃い二日間になった。本セッションでは割り当てられた時間を大幅に超える口頭講演27件を含む計29件の申し込みがあり、世話人の予想以上に多くの方に興味を持っていただけた。最終的な調整の結果、銀河系中心研究の各分野で活躍している6名の研究者による基調講演に加えて、口頭講演14件、ポスター講演15件の計35件の講演が行われた。初日の第1セッションは国立天文台の岩田悠平氏、ゲーテ大フランクフルトの森山小太郎氏の基調講演を中心に、EHTやALMAなどによる銀河系中心ブラックホールのSgr A\*に関する最新の観測的研究や、関連する理論研究に基づく最新の成果が報告された。二日目の第2セッションは大同大の齊田浩見氏、国立天文台の馬場淳一氏を基調講演者に迎え、EHTやSubaruなどを用いた銀河系中心領域を用いた重力理論の検証から始まり、中心核バルジおよび中心核星団に対する最新の理論的研究、Subaruを用

いた観測的研究、そしてJASMINEやTMTなどの将来の観測装置を用いた研究の展望など多くのトピックが議論された。そして最後の第3セッションでは慶應大の岡朋治氏、奈良教育大学の信川正順氏の基調講演を軸として、近年ALMAなどを用いた電波観測やSuzaku衛星などのX線観測で活発な研究がなされている中心分子雲帯の研究について最新の成果やXRISM衛星への展望が幅広く紹介された。本セッションには現地参加者が最大70名、リモートの参加者を合わせると最大100名を超える研究者が参加し、改めて銀河系中心研究に対する幅広い関心を印象付けるものとなった。どの講演でも積極的に質問がなされ、講演者と聴講者との間で活発な議論が交わされていた。

銀河系中心研究は既存の観測装置だけでなくSKA, ngVLA, 拡張ALMA, ngEHT, JWST, TMT, JASMINE, Subaru/ULTIMATE, そしてXRISM衛星など次世代の観測装置の登場により、今後も天文学研究のフロンティアの一角として観測・理論の双方で多くの研究の進展が見込まれる。本企画セッションが、銀河系中心の様々な空間・時間スケールの天体現象に関する理解を深め、研究者同士のさらなる交流を後押しし、そして2030年代に向けた今後の研究展開を考えるきっかけとなれば幸いである。改めて、本企画セッションを実りあるものにしてくださった多くの講演者や参加者の皆様、特に限られた割り当て時間の中で多くの方に講演機会を与えるべく講演形式の調整に協力していただいた講演者の皆様にこの場をお借りして感謝させて頂く。

<天文教育フォーラム>

会期初日となる2022年9月13日(木) 16:30より18:00に、年会K会場において、日本天文教育普及研究会との共催により、天文教育フォーラムが開催された。今回の教育フォーラムは「新しい学習指導要領を考える」をテーマとし、約120名の方にご参加いただいた。

2022年度より高校でも新しい学習指導要領による指導がスタートした。今回の改訂では、全教科探究型授業へのシフトや、理数科の導入など、新しい試みがなされている。そこで、今回の教育フォーラムは、新しい学習指導要領について学び、各々の立場でどのような対応ができるのかを考え議論することを目的として開催された。

学習指導要領の現状を確認するとともに、学校教育をはじめ大学・研究施設や社会教育施設、普及活動の現場などでどのようにすべきか議論するにあたり、今回は2名の招待講演者をお招きし、基調講演をお願い

した。はじめに現場での教員の立場から、石田光宏氏（横浜市立戸塚高等学校）に「新学習指導要領と学校教育現場での探究的活動」というテーマでお話いただいた。高等学校における探究的活動の中での天文分野での実践例や、教師への影響など、実践からどのようなのがみえるかについてご紹介いただいた。次に教育学研究の立場から、理科教育やアクティブラーニングの専門家でいらっしゃる土佐幸子氏（新潟大学教育学部）に、「新学習指導要領のレビューと最新の研究成果」というテーマでお話いただいた。ご講演では、理科教育研究者の立場、また長年にわたるアメリカで教育研究に関わられたご経験から、世界の教育の潮流と学習指導要領との関係も含めレビューしていただいた。

2件のご講演を受け、参加者全体で議論を行った。この中では、ご講演内容に関する質問の他、社会教育施設など学校外教育との関係について、プラネタリウムの利用や連携、「社会とのつながり」をどのように考えるか、大学における教員養成との関係などについての議論がなされた。今回はハイブリッド開催であったが、会場のみならず、オンラインの参加者からも活発にご意見頂いた。

本フォーラムは学習指導要領とは何のためにあり、またどのように向き合うべきか、改めて考えるきっかけとなったのではないだろうか。

（鷹野重之）

#### 〈公開講演会〉

年会開始前の9月11日（日）の13:30-16:00にかけて、新潟市民プラザおよびZoomウェビナーによるハイブリッド型式で公開講演会を開催した。「天文学の新展開」と題し、小山翔子氏（新潟大学）および藪田ひかる氏（広島大学）が講師をつとめられた。講演会は新潟大学の西亮一と下西隆の司会により進行し、冒頭で山本智会長（東京大学）が挨拶を行った後、天文教育理事の富田晃彦氏（和歌山大学）が趣旨説明を行い、講演が始まった。

小山氏は「天の川銀河中心にあるブラックホールの撮影」と題し、イベント・ホライズン・テレスコープ（EHT）によるブラックホールシャドウの撮像について話された。講演前には、EHT日本チームの代表である本間希樹氏（国立天文台）がオンラインで登場し小山氏の紹介を行い、会場を盛り上げた。講演では、

電波で見る宇宙や干渉計についての基本的な解説から、ブラックホールシャドウの画像にたどり着くまでの取り組み、データの持つ科学的意義、そして今後の展望などについて分かりやすく解説が行われた。質疑応答の時間には、「ブラックホールは何のためにあるのか?」という質問が小学生から飛びだし、講師も関係者も深く考えさせられる場面があった。

小休憩の後、藪田氏が「小惑星リュウグウの分析からわかってきたこと：わたしたちはどこからきたか」と題し、探査機「はやぶさ2」が小惑星リュウグウから持ち帰った表層サンプルについての講演を行った。太陽系の成り立ちや惑星の材料となる物質に関する解説から始まり、「はやぶさ2」によるサンプルリターンの持つ意義、カプセル帰還時の様子、地上の物質による汚染を避けるための様々な工夫、実際の分析の様子や得られた初期成果など、幅広い内容について分かりやすく解説が行われた。極めて注意深い作業が必要な分析の様子を、現場の人間の生の声として聴衆に届けることで、科学者の持つ熱量を感じてもらえたと思っている。

講演会終了後には、参加した小中学生と講師らが交流する時間を設け、質問や記念撮影などを行った。今回の講演会には、新潟大学が実施している新潟ジュニアドクター育成塾に参加する小中学生が多く現地参加をした。熱心に様々な質問をする多くの子供達の姿を見て、対面開催の重要性を深く実感した。

最終的な参加者は約120名で、現地とオンラインがおおよそ半々であった。現地参加者からの感想として、「宇宙にはまだわかっていない不思議なことがたくさんあって、世界協力で研究しているのがすごい。」「ブラックホールはなんでも吸い込むだけでなく、はきだすこともあることを知っておどろいた。」「はやぶさ2が生命の材料になるかもしれない物質をリュウグウから採取してきたことがすごいと思った。」などがあり、非常に興味をもってもらえたことがわかった。また、「わたしもこのような研究ができるようになりたい。」との声もあった。参加者の中から未来の科学者が生まれてくるきっかけの一つとなれば、公開講演会の企画・運営をした者としてこの上ない喜びである。最後に、この場を借りて、講師の方々、関係者の方々、そして参加者の皆様に感謝の意を表したい。

（下西隆、西亮一）

（年会実行委員長：古澤久徳）

天文月報オンラインのIDとパスワード

ID: asj 2022

パスワード: 雑誌コード (5桁の数字) と **vol115** (6文字) の計11文字を入力してください。「雑誌コード」とは印刷版の月報の裏表紙の右下に書かれている「雑誌○○○○○—▲」の○○○○○の部分です。○○○○○は各号共通の数字です。

編集委員: 江草芙実 (委員長), 市川幸平, 岩井一正, 岩崎一成, 小高裕和, 小野寺仁人, 嘉数次人, 勝田哲, 川中宣太, 津村耕司, 西澤淳, 西塚直人, 秦和弘, 福井暁彦, 仏坂健太, 前原裕之

令和4年11月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円 (本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359 (事務所) / 0422-31-5488 (月報) Fax: 0422-31-5487 振替口座00160-1-13595

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: [toukou@geppou.asj.or.jp](mailto:toukou@geppou.asj.or.jp)

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会 2022年 (本誌掲載記事は無断転載を禁じます)